

安茂 興人
Anmo Kyojin

私の★骨折入院日記



青山ライフ出版

▼▼ 目次 ▲▲

初めに	4
骨折のきっかけ	5
入院から手術まで	14
術後1週間まで	25
術後1週間後から3週間後の退院まで	36
退院から退院後1か月	44
退院1か月後から退院3か月後	49
受傷後3か月後から受傷後6か月後	56
術後6か月後から9か月後	59
受傷後9か月から再手術へ	61
二度目の手術	63
それから	67

私の骨折入院日記

初めに

皆さまは病氣や怪我で入院し、手術をし、比較的長い間ベッドに収容されたご経験がおりでしょうか？ 多分、大きな手術や長期間の入院を体験された人の数はそうは多くはないと思います。そのなかでも死をもってその体験が終わった人はもつと少ないでしょう。

私は骨折治療でしたので死をもって治療が終焉したものではありませんが、とかく長期間入院加療するということは大変なもので外界では体験しえない数々の出来事を見聞きしたという点においては非常に有意義なことでした。

私の骨折治療に多大な支援を賜りました故大津富美子氏（我が妻）に最大級の賛辞と感謝を贈りたいと思います。自らも末期の癌を患いながら、仕方がないこととはいえ多岐にわたって体の自由の利かない私を支えてくれた俠氣と温情に励まされ私は再び歩けるようになりました。

骨折のきっかけ

およそ怪我と言うものはいがいけないことから起きてしまうものです。あれは忘れもしない私のX歳の誕生日の日、友達の家に招かれて友達の収集した化石や世界のお土産品などのお宝を喜んで眺めておりました。場所は2階の友達の個室です。私は彼が保有しているアンデスの石の面が痛く気に入りました。譲りうけることにしました。ついでに私のコレクションにしているアンモナイト標本の仲間で、彼がミネラルショーで手に入れたものを数点もらい受けました。これらは片手にまとめて全部持ちきれないので両手に半分ずつ分けてビニ袋に入れてぶらさげていてそのままの状態です。階段に降りようとしてきました。つまり両足だけを階段の板に接地し上半身は極めて不安定な姿勢で階段を降りようとしてきました。

階段の中ほどで非常に滑りやすい板が1枚あり、右足を乗せたところ、「あつ」と思った瞬間その右足が滑り出て、私は階段から投げ出されるように宙に浮きました。人体と言うものは頭部のほうが重いのです。空中で空転してはじめは頭部が下で落下しそうになりました。生来意地汚い性格なのでしょうが、こんな事態になっても持っているものを手放そうとはいたしません。両手が物でふさがっているので階段のでっぱりをつかむ等の防御反応が一瞬遅れました。パニック

になりながらもこういう事故で頭から落下して強打して亡くなった谷啓さんの事が一瞬間に浮かび、両手のものはようやく手放してフリーになった手を思い切り目前にせまる階段横の壁について足側を下に反転させ落ちていきました。時間にしてわずか1秒か2秒だったでしょうか。足が下側に補正できましたのでこれに死にはしないと思いましたが、落下前の高さは1階の床から3mぐらいはありましたでしょうか。反動がついていたので足から着地したというか足を不自然に階段のでっぱりに打ち付けながら落ちて行ったという記憶があります。そのまま1階の床に激突したときかなりの衝撃がどこと具体的には言えませんがありません。痛みはまだ脳に伝わっておらず、ただただダウンという衝撃感覚だけが伝わりました。骨の折れるほきつと言う音は聞き取れませんでした。強烈な打撲感はありませんでしたが不思議と痛みはなかつたです。今まで味わったことのない下肢が不安定でぐらぐらする感じはしていました、まさか折れているとは感じず、健康な左足を支点に上腕も使って体をずりながら動いてソファーに腰を下ろしました。そのときは以前何回もやっている捻挫の類だと思っておりましたので、のんきにもまた30分もすれば動けるようになると思っていました。骨折したとき襲ってくるというあの強烈な痛みはまだ来ません。今まで経験したことのない足がぶらぶらする異様な感覚が右足のあちこちですることはさすがの鈍い私にもわかりました。後で考えてみたらそれは骨が折れているサインでした。

30分ほどしていざ立とうとするといつのまにか右足が統合性を失って全く使えなくなってお

り、筋肉に全く力が入らずどんなに努力しても立てないことが解りました。

痛いからではありません。立とうとしても折れている方の右足がどんなふうにも支柱として動かせないのです。これは大変不思議なことで折れた直後の時点では少しは痛いけど動かせたのです。おそらくまだ周囲の筋肉などが骨を支えていて支点を失ったにもかかわらずこの時点では多少の支持体としての動きは保持されていたのでしょう。

こんな状態になっていてもそのうち徐々に回復してきて、ここから電車に乗って立ってでもドアに寄り掛かるなどして我が家に帰れると考えていたのですから、楽観的と言えば楽観的すぎますね。しかし、どんなに努力して足を動かそうとしても動けないので進退窮まりまして、帰るために応急処置をもらおうと友達に頼んで近くの病院へ連れて行ってくれるようお願いしました。当日は祝日で悪いことに大半の病院は休診でしたけど、幸いなことに休日診療と言うことでなんと近くの整形外科があいていました。私は友達に肩を貸してもらい呼んでもらったタクシーにやっとのことで乗せてもらってその病院に運び込まれました。

もう診療先の玄関からなだれ込むように廊下に担ぎ込まれ、待合の椅子にはまったく座れないので廊下に転がっていました。宿直の先生がどうしたのかねとビックリした顔でこちらを眺めています。「階段から落ちて足を強打しました」先生は軽くうなずかれると折れていると思われる足のほうをそっと触ると「すぐX線撮影をする必要がある」とおっしゃいました。私は座ること

もできないので待合室の前のキャスター付きソファーに毛布を掛けられて寝かされました。友達
の怪力が役に立ちました。その状態でレントゲンを撮影しました。しばらくして看護師さんが来
てレントゲンフィルムの入った封筒を持ちながら、診察に入りますと言ってソファーごと診察室
です。「やっぱりなあ。骨がぐちゃぐちゃに折れているよ。このレベルはちよつとギブスで固め
て治るレベルじゃない。手術をして骨を修復せにやならん。結構なおるまでかかるよ。全治6か
月かそれ以上だな」といってフィルムを見せてくれました。私が見ても脛骨の中央部と腓骨の下
部2か所が明らかに折れていて互い違いにずれており、特に腓骨のくるぶし近くは構造が解らな
いぐらいぐちゃぐちゃでした。骨折部位は上位の骨と下部の骨が入れ違いに突き出ています。こ
ういう折れ方の場合は骨をおもりでけん引してもピタツと合わせることが出来ないので手術して
金属カバーとボルトを使って正しい接合位置に強引に戻したうえで固定するのだそうです。あと
はそのまま折れた骨同士が接合するまでそのままだそうです。その手術様式を聞いて私は身震い
しました。ああ、皮膚と筋肉を切り開いて折れた骨を露出し鉗子みたいなやつでずれている骨同
士を引き寄せてびったり合わせ、その両方の骨にドリルで穴をあけて金属プレートとねじで固定
するのだな。骨を覆っている骨膜は特に痛覚神経が発達していてちよつとでも傷がつくと激痛が
する組織だそうです。それを切り開き穴をあけるなんて聞いただけで痛そうだなあと身震いしま
した。